

聖書 詩編第121篇

121:01 【都に上る歌。】目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。 121:02 わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。 121:03 どうか、主があなたを助けて 足がよろめかないようにし まどろむことなく見守ってくださるように。 121:04 見よ、イスラエルを見守る方は まどろむことなく、眠ることもない。 121:05 主はあなたを見守る方、あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。 121:06 昼、太陽はあなたを撃つことがなく、夜、月もあなたを撃つことがない。 121:07 主がすべての災いを遠ざけて、あなたを見守り、あなたの魂を見守ってくださるように。 121:08 あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そして永久に。

聖書 ルカによる福音書2章41～52節

02:41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。 02:42 イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。 02:43 祭りの期間が終わって帰路についた時、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。 02:44 イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから親類や知人の間を捜し回ったが 02:45 見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。 02:46 三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。 02:47 聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。 02:48 両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれましたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」 02:49 すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」 02:50 しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。 02:51 それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。 02:52 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人にと愛された。

説教『神様は常にあなたを見守って下さる』

◆今日は母の日を覚えて子供と大人の合同礼拝をこのように捧げることができ感謝いたします。子どもたちはさっきまで3階にいましたが、今は階下に行ったようです。小さい子供は階下にいますが、皆さんも大きな子ども、年寄りになった子どもですから、私達は全員子供です。私は、皆さんのお母さんにお会いした方もありますけれども、皆さんのお母さんにお会いしていない方のほうが多いと思います。けれども皆さんが今・ここに、このようにあることをお母様方は心から喜んでおられると思います。わたしたちは皆、神様を礼拝し、神様に感謝する、そういう人生を今送っています。これ以上の幸いはありません。親にとって、母親にとって、子どもの幸せ以上に嬉しいことはないのであります。ですからお会いしたことの無いお母さんも、皆さんが今このような幸いの中にあることを喜んでおられるに違いありません。ですからわたしたちにとっても、後に続く者への最大の贈り物は、この幸いに、皆が与かれるように、子にも孫にも曾孫にも、よそ様の子達にも伝えること以外にないと思います。

◆私が北教会に赴任して今日で丁度 22 年になります。22 年前の牧師就職式には、私の母も出席しておりました。そして翌年の 8 月 8 日に母は召されたのですが、赴任した年のクリスマスに牧師の息子から洗礼を受け、そして葬儀も息子牧師の司式で行われました。私はそのような次第になる事を想像することさえできませんでした。私が神学校へ行く決心をしたのは 1962 年 1 月 4 日の事でした。会社を辞め、神学校に行く決意を伝えると、周りの人が皆、「なんでや」と驚く中で、母は「お前がそうしたら、やり！」と言ってくれたのです。その母の言葉に背中を押されて、神学校へ行ってもう 54 年以上になります。その時の母の歳を数えてみましたら、まだ若い 42 歳です。そのような次第で、神様のなさってくださいすることに感謝しないでおられません。

◆今日は、詩編第 121 篇とルカによる福音書の 2 か所を読んでいただきました。この 121 篇は覚えている人も多いと思いますが、これは「過越祭」とか「5 旬祭」など、「都詣で」の時の歌です。今は「都に上る歌」となっています。これは、祭りに向かう者の道中を神様の御守りに委ねる祈りです。今日のルカ伝によれば、イエス様はご両親と一緒に祭りに登られたとあります。故郷のナザレから都エルサレム迄は約 100 キロの距離です。幼児を含めた徒歩の巡礼旅ですから、1 週間位はかかったでしょうね。その道中もこの詩篇を歌い交わしながら、エルサレムに向かったことでしょう。

◆それはそうとして、私は今回、ルカ伝が記すエルサレムでの過ぎ越しの祭におけるイエス様の様子、ご両親の様子などみて、「あっ！この詩編 121 篇は、母親の子どもを思う祈り、信仰の祈りだ」と、思いました。始めに「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ」とあります。具体的にはエルサレムに向かうわけですが、子供たちも、それぞれの人生を歩み、成長して行きます。しかしその途上には高い山もあれば、深い谷もあります。そういうことに思いをはせます。「わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」。これは母親の信仰ですね。そして「どうか、主があなたを助けて、足がよろめかないようにし、まどろむことなく見守ってくださいるように。見よ、イスラエルを見守る方は まどろむことなく、眠ることもない。主はあなたを見守る方 あなたを覆う陰、あなたの右にいます方、昼、太陽はあなたを撃つことがなく、夜、月もあなたを撃つことはない。」「右」というのは「南」という意味もあります。南からの太陽が射す、灼熱の砂漠も通って行かねばなりません。その時、神様が覆いになってくださるということなのです。7 節、「主はすべての災いを遠ざけてあなたを見守り、あなたの魂を見守ってくださいるように。あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださいるように。今も、そしてとこしえに。」これは子供を思っの母親の神への祈りです。そう言ってよいのではないのでしょうか。

◆今日は週報の「牧師の落穂拾い」に水野源三さんのお母さんを思う詩を載せました。「肩の痛さ 足の痛さをこらえながら 重い孫をお守りしながら(このお孫さんは、水野さんの弟さんの子どもさんですね。)体の不自由な私の面倒を見てくれる母の上に、愛のきわみなる神様！あわれみと恵みを、助けとささえを、豊かにお与えください」。これは母を通して命を与えられ、また信仰を与えられた、水野源三さんの母への感謝、神様への感謝と祈りですね。去年の母の日の週報を見ましたら、星野富弘さんのやはり母を思う詩を落穂拾いに載せていました。星野さんは今年古稀を迎えておられます。それはこういう詩です。“神様がたった一度だけ、この腕を動かしてくださるとしたら、母の肩を叩かせてもらおう。風に揺れるペンペン草の実を見ていたらそんな日が本当にくるような気がした。”「ペンペン草」というのは、「なずな」の俗称です。そのペン

ペン草が揺れているのを見ながら、この腕が動くならば、母の肩を叩かせてもらおう。これは富弘さんのお母さんへの感謝の歌ですね。そして神様は星野さんのこの願い、祈りを叶えて下さいましたね。

◆今日のルカによる福音書ですが、イエス様は12歳の時にご両親と一緒に過ぎ越しの祭りに行かれました。それでエルサレムの祭で過ごすのが1週間、そしてまた1週間位かかって、故郷に帰る。そんな巡礼の旅でした。イエス様のご両親は慣習に従って毎年のように都詣でをされたようですね。43節、「祭りの期間が終わって帰路についていた時、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。」イスラエルでは13歳で、我々で言う成人式です。44節、「イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。『なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。』」

◆こういう次第です。そして両親はイエス様が見つかった以上に、イエス様を見て驚くと共に、母のマリアさんが言います。「なぜこんなことをしてくれたのです。ご覧なさい、お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と。もう一人で大丈夫と思ってもやはり子供だったということかもしれませんが、本当に心配した様子がよくわかりますね。するとイエス様は「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのはあたり前だということを知らなかったのですか」と言われました。まあ、12歳ですから生意気ざかりなのですが、両親はこのイエス様のお言葉の意味が分からなかったのです。それからイエス様はナザレに帰り、両親に仕えてお暮しになったのですね。「母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」と聖書にあります。

◆今回ようやく、『教会創立130周年記念誌』が出来たのですが、今までの記念誌と違う事があります。「中学3年生、日曜学校生徒」の文章が出ている記念誌はこれが初めてです。柴田果歩ちゃんの文章です。「教会は、私にとって宝物です。」「教会で学んできたことはこういうことです。」と書いてくれているのですが、何か今日のイエス様の返答と重なるように思えるのです。イスラエルの人たちの信仰、祈りは、先ほどの詩編第121篇の「あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」に集約されていると思います。そしてさきほど歌いました讚美歌120番は、第121篇と双璧をなす詩篇第23篇です。「命ある限りさちはつきず、主の家にわれは永遠に住まわん。」これはイスラエルの皆の歌なのです。そして私たちの歌にもなっています。「命ある限りさちはつきず、主の家に我は永遠に住まわん。」そして今日の121篇「あなたの出で立つのも帰るのも主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。」こういう信仰で生きているのがイスラエルの人々なのです。◆けれどもいざ実際にこういうごった返している祭りの只中で、12歳の少年がはぐれたとなったら、大変な心配をして、必死になって探し回るのが母親というものですね。しかしこの巡礼の道中で詩篇121篇を歌い、また詩篇23篇を歌い、そしてそのことをエルサレムの過ぎ越しの祭りで、本当にその事を確認して故郷に帰る。そこで、このハプニングが起こったわけです。お父さんもお母さんも大いに慌てたということなの

です。ところがイエス様は、12歳のイエス様は、歌ってきた詩編・讚美歌を真に受けて、イエス様は「命ある限り、幸は尽きず、主の家に我は永久に住まわん。」「われの出立つのも帰るのも主が見守ってくださる。今も、そしてとこしえに」を、文字通り信じておられるのです。ナザレであろうが、エルサレムであろうが、その道中であろうが、高い山であろうが、深い谷であろうが、そこもまた、主の見守りの真下なのだ、真只中なのだということを、これらの詩編は歌っていると思うのですね。イエス様はそのことを本当に信じておられたのです。だから私たちは年と共に信仰が熟して行くという事は確かにありますが、けれども少年イエス様のように、幼児の混じり気のない神様への信頼を、大人の信仰者は時として失うということがあると思うのですね。ですからイエス様も後日「あなたがたも幼子のようにならなければ、神の国に入ることはできない」とおっしゃっているのだと思います。本当に聖書に記されてある通りのことをなさってくださる神様、イエス様のことを本当に信じてこのお方がどのような時にもわたしたちを顧みて共に居てくださることを、心から信じたく思います。

◆去年の春のオープンチャーチのゲスト、オーラ・リードさんはこう言われました。” My life is a living testament.” と。「私の人生は生きた聖書です。」「私の人生は生きた聖書の証しです」とオーラさんは言われたのです。Testament は「聖書」のことですが、「証し」が元来の意味です。そういう意味で、私たちもよくよく自分の人生を振り返ってみれば、この人生は本当に神様の御顧みがなければ、今・ここにわたしがいるということにはなかったと思います。そういう意味で、わたしたちも素直に、心から、「私の人生は本当に神様の恵みの生きた証しです」と、感謝しつつ、わたしたちも言えるのではないのでしょうか。

◆そんなわけで、わたしたちはいずれにしても母があつてこの生を与えられました。今日の朝日新聞社会面に、こんな記事がありました。両親がいて3人の子供がいる。3歳が一番下の子が万引きをして警察につかまったという記事です。両親は借金で幼い子供を養われたい。上の子二人も何度も万引して捕まっているという記事です。そういう意味で、本当に母親に感謝できる人生でないといけませんね。母親を悲しませ、子供を悲しませる社会はダメですね。母親が喜べる、そして子供が本当に幸せである事を母親が感じられる、そういう社会、世界に変わっていかないとはいけません。そのためには私達にも必死さが必要です。聖書の神様は、イエス様は、私たちの為に、命をかけて下さいます。実行して下さる神様です。要は、今日のマリアさんに匹敵する真剣さ、そして神様が、イエスさまがなさってくださったし、今もなさってくださる命がけの愛、それにわたしたちが与かって行く時、母親も喜び、子供も喜び、神様も喜んでくださる社会に変わっていくのではないのでしょうか。今日、母の日を覚え、それぞれの両親に感謝しつつ、またこのような幸いな人生を与えてくださった神様に感謝しつつ、思いを新たにして、これからの人生を充実させたく思います。

◆お祈りいたします。

恵みと憐みに満ち給う主イエス・キリストの父なる神様！

私たちが今このような幸いに与かっていることを感謝いたします。私達は時に迷い、愚かなことをしてしまいますが、あなたが今日に至るまで守り、導いて下さいました事を感謝いたします。どうか世界中の親達が、子供達が、本当に喜べる世界にしてください。またそのために私たちに出来る限りのことをなさしめてください。

この祈りイエス様の御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。